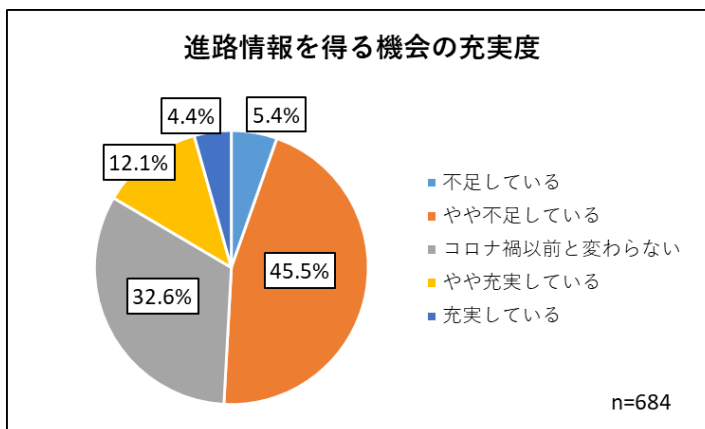


## With コロナ時代の進路指導と進路選択に関するアンケート調査 “進学情報の入手はイベントで。8割以上の教員が「対面型」を重視” 高校進路指導部対象「進路指導と進路選択に関するアンケート調査」より

全国の高等学校で進路行事を企画・運営し、高校生の進学・就職を支援する株式会社ライセンスアカデミー（本社：東京都新宿区、代表取締役：白田 康則）は、全国の高等学校を対象に、With コロナ時代の進路指導および高校生の進路選択の状況について調査すべく、全国の高等学校にアンケート調査を実施いたしましたので、ここにご報告いたします。

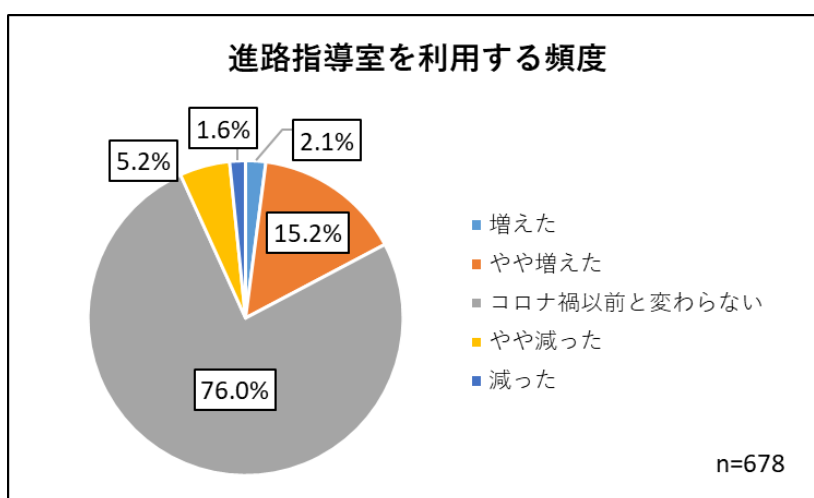
### Q1. 生徒が進路情報を得る機会の充実度についてお答え下さい。

「不足している」と「やや不足している」を合わせると、約5割の教員がコロナ禍において生徒の進路情報を得る機会が減少していると回答した。「充実している」「やや充実している」を合わせても2割以下に留まっている。約3割の教員が「コロナ禍以前と変わらない」と回答しているが、コロナの感染拡大が生徒の進路情報を得る機会に影響を及ぼしていると考える教員が多いことが分かる結果となった。



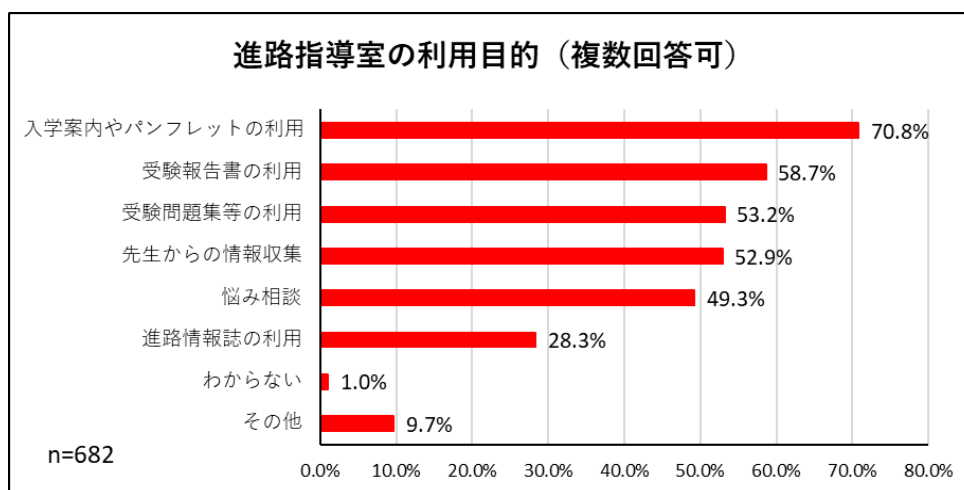
### Q2. 生徒が進路指導室を利用する頻度についてお答え下さい。

コロナ禍で進路関連イベント等が中止や延期になるなか、進路情報を得る手段として学校内の進路指導室を生徒がどれほど活用しているかを把握するための質問である。最も多い回答は「コロナ禍以前と変わらない」で76.0%だった。「増えた」「やや増えた」を合わせると17.3%の教員が進路指導室を利用する生徒が増えたと回答した。「減った」「やや減った」と回答した教員は全体の6.8%だった。高校内で進路情報が集まる進路指導室を、情報を得るひとつの手段として活用する生徒が一定数増えたことがわかる。



### Q3. 生徒は進路指導室をどのように利用していますか。(複数回答可)

「入学案内やパンフレットの利用」(70.8%)のために進路指導室を活用する生徒がもっとも多い結果となった。次いで、先輩たちが残した受験記録である「受験報告書の利用」(58.7%)、「受験問題集等の利用」(53.2%)が続いている。資料の利用が進路指導室を活用する



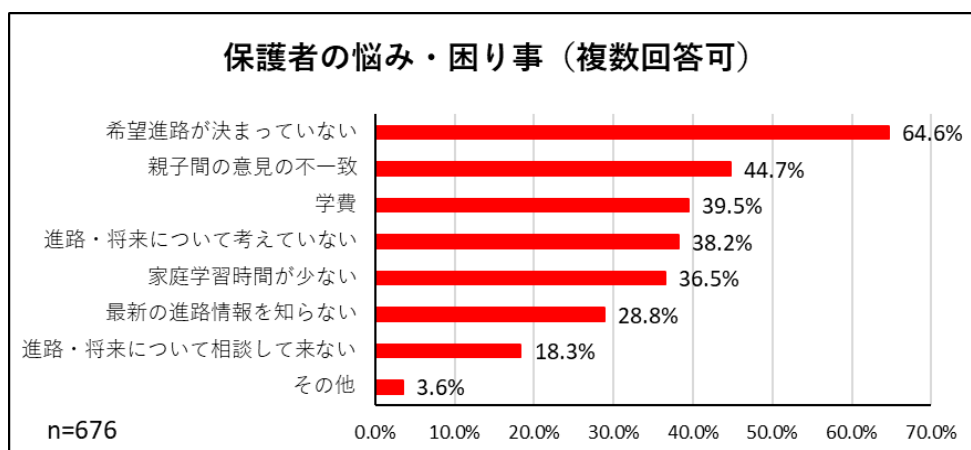
目的の上位を占めたなか、「先生からの情報収集」(52.9%)や「悩み相談」(49.3%)など、個別のアドバイスのために生徒が活用していることもわかった。

「その他」(9.7%)には、Web 出願、自習室としての利用、求人票の検索と閲覧、出願書類の作成、面接指導・履歴書作成などがみられ、進路指導室はさまざまな目的で活用されていることがわかる結果となった。

### Q4. (特に三者面談で)保護者から寄せられる悩みや困り事で多いものについてお答え下さい。(複数回答可)

本アンケート取得時期が三者面談を実施する高校が多いタイミングであったことから、保護者の抱える悩みや困り事を把握するために当該質問を用意した。

「希望進路が決まっていない」(64.6%)と回答した教員がもっとも多い

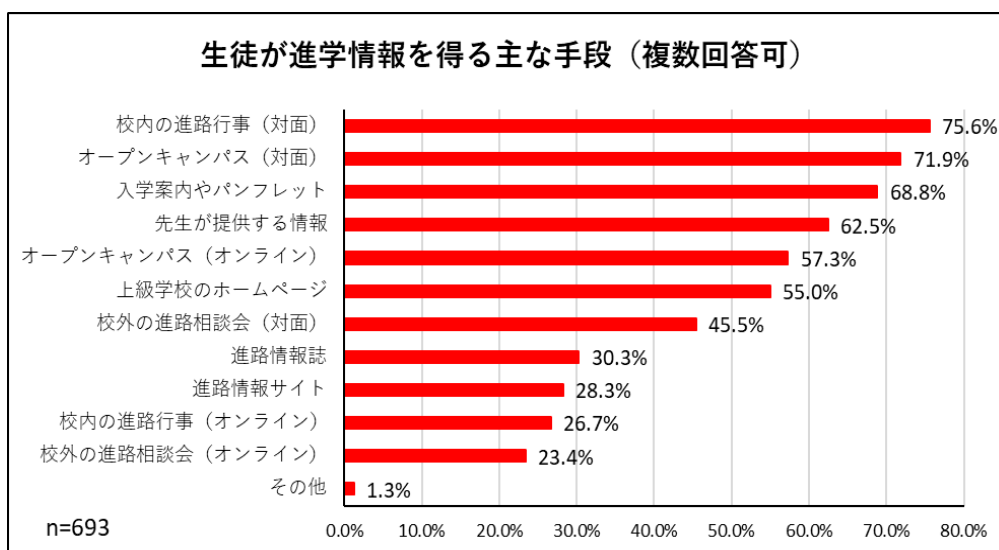


結果となった。本アンケート調査は学年を指定しての回答を求めているため、結果には進路選択まで比較的時間のある1、2年生に関わる内容も含まれると想定される。しかし、希望進路が決まっていないことにくわえ、「進路・将来について考えていない」(38.2%)、「進路・将来について相談して来ない」(18.3%)など、保護者は子どもの希望進路が不透明なことを心配している様子がうかがえる。

また、「学費」(39.5%)に関する困り事を抱える保護者も多い。生徒が希望する進路に関わる学費や奨学金など、保護者の悩みに答えるには相当な情報量を持っておく必要があるはずである。また、「親子間の意見の不一致」(44.7%)についての相談も多く寄せられるようだ。双方が納得する進路選択が実現するよう、この点においても教員は、学校や業界、分野などの最新情報を保持しておく必要があるといえるだろう。

## Q5. 生徒が進学情報を得る主な手段は何ですか。(複数回答可)

多くの項目で一定の回答数があったことから、生徒は様々な手段を複合的に活用しながら進学情報を集めていることがわかる。ただ目立ったのは、コロナ禍においても生徒が進学情報を得る手段は「校内の進路行事(対面)」(75.6%)、「オープンキャンパス(対面)」

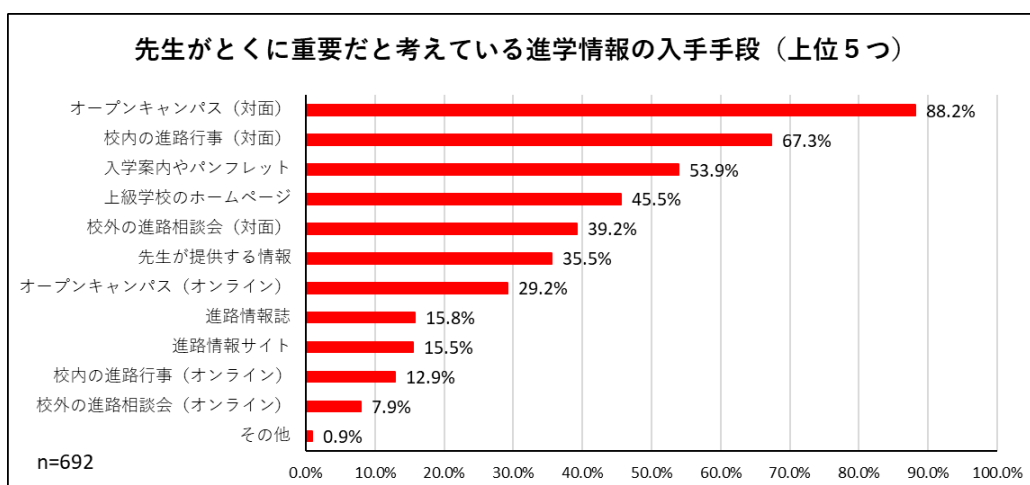


(71.9%)と、対面のイベント系が主体であることだ。

コロナ禍で導入が進んだオンラインによるイベントでは、大学や専門学校が実施するオープンキャンパスが57.3%を占めた一方で、高校主体で行われる「校内の進路行事(オンライン)」(26.7%)では3割を切っている。進路イベント関連業者主体の「校外の進路相談会(オンライン)」(23.4%)では2割弱だった。オンラインツールが普及したコロナ禍であっても、進学情報を得る手段は対面型のイベントを望んでいることがわかる結果となった。

## Q6. 生徒が進学情報を得る際に、先生方がとくに重要だと考えている手段は何ですか。(上位5つまで)

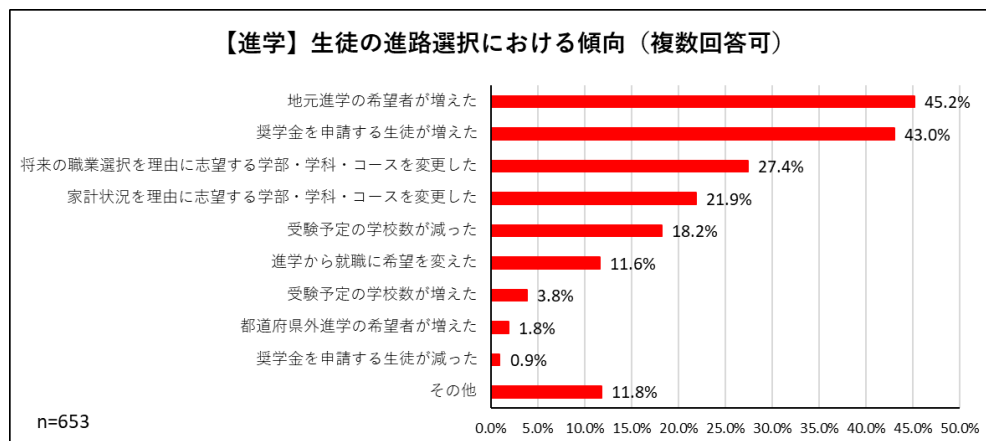
Q5のなかで、教員がとくに重要だと考えている進学情報の入手手段について聞いた。結果は、「オープンキャンパス(対面)」(88.2%)が圧倒的で、次いで「校内の進路行事(対面)」(67.3%)が続いた。Q5の結果と同様に、対面でのイベントを重視していることがわかる。



一方、オンラインによる入手手段の割合は、Q5で5割を超えた「オープンキャンパス(オンライン)」でも29.2%で、「校内の進路行事(オンライン)」は12.9%、「校外の進路相談会(オンライン)」は7.9%と、どれもQ5と比べて低かった。このことから、進学情報を得る際には、直接見学すること、直接話を聞くことが重要であると考えている教員が多いことが明らかになった。

## Q7.【進学】生徒の進路選択における傾向についてお答え下さい。(複数回答可)

コロナ禍での進学希望者の進路選択における傾向について、最も多かったのは「地元進学の希望者が増えた」(45.2%)と「奨学金を申請する生徒が増えた」(43.0%)だった。首都圏や地方主要都市でのコロナ感染拡大をき

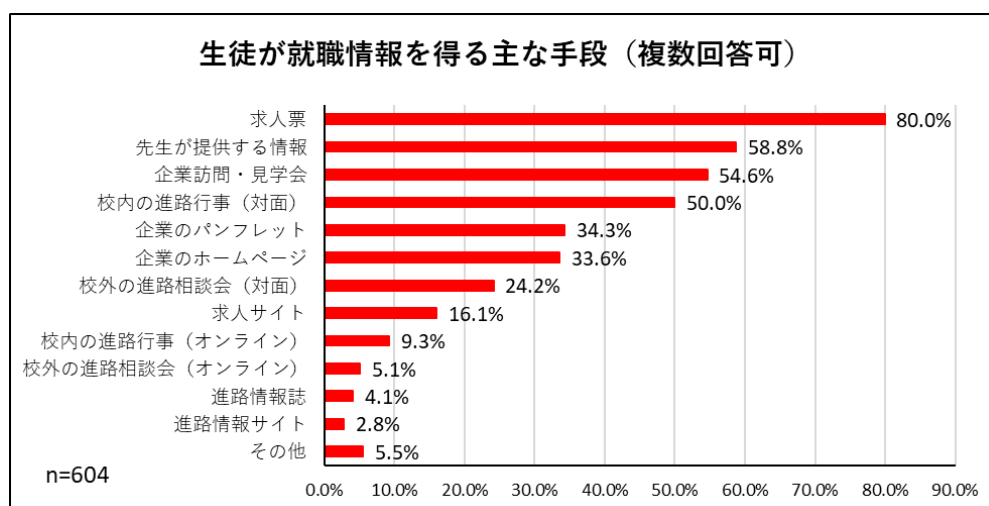


い、地元志向が広がった傾向にあるようだ。また、4割以上の教員が奨学金を申請する生徒が増えていることを認識していることにくわえ、将来の職業選択もしくは家計状況によって「目指す学部・学科・コースを変更した」と回答した教員も、合わせて5割程度いた。このことから、コロナの感染拡大は、進学を希望する高校生に進路選択や学費の面で影響を及ぼしていることがわかる。

ただ、「その他」(11.8%)の回答のなかには「とくに変化はみられない」との意見も多かったことから、とくに影響を受けていない高校生もいる。そのほか、「総合型選抜や推薦型選抜での受験を考えている生徒が増えた」といった意見や、「ランクを下げた指定校が増えた」など、受験機会を増やしたり、合格可能性の高い選択をしたりすることで浪人のリスクを避けるとともに、早期に進学先を決定したい傾向が強くなったとする声があった。

## Q8. 生徒が就職情報を得る主な手段は何ですか。(複数回答可)

就職希望者が就職情報を得る手段としてもっとも多かったのは「求人票」(80.0%)だった。求人票が就職希望者にとって大きな役割を果たしていることがうかがえる。「企業訪問・見学会」(54.6%)や「校内の進路行事(対面)」(50.0%)など、企業担

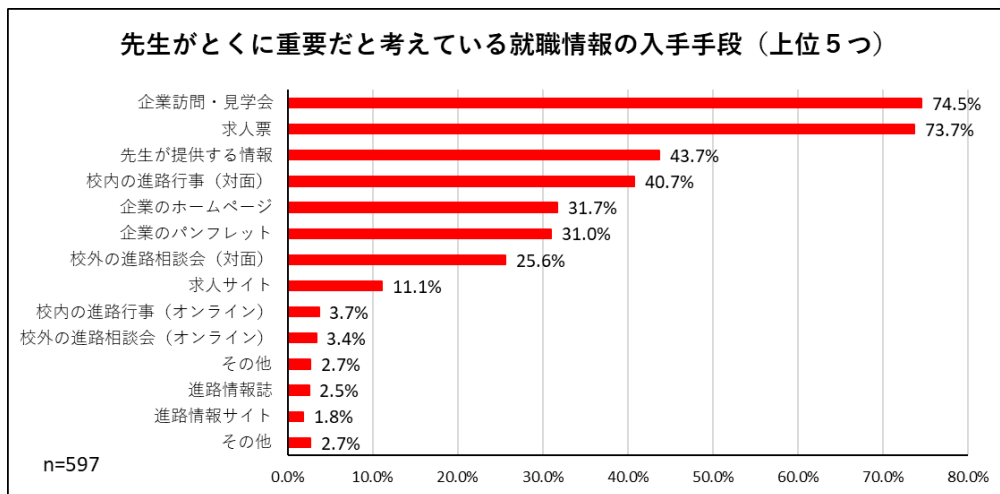


当者と直接的にやりとりできる手段も5割を超えたものの、オープンキャンパスなど進学のそれと比べると割合は下がった。オンラインによるイベントも同様に、進学と比べるとその割合は大きく下がり、就職希望者が情報を得る手段は進学と比べるとやや限られている印象を受ける結果となった。「その他」(5.5%)には「ハローワーク経由」や「先輩・保護者からの情報」などが複数件みられた。

**Q9. 生徒が就職情報を得る際に、先生方がとくに重要だと考えている手段は何ですか。(上位5つまで)**

Q8のなかで、教員がとくに重要だと考えている就職情報の入手手段について聞いた。

「企業訪問・見学会」(74.5%)、「求人票」(73.7%)がもっとも多く7割を超えた。教員も求人票が就職希望者にとっての重要な情報であると認識して

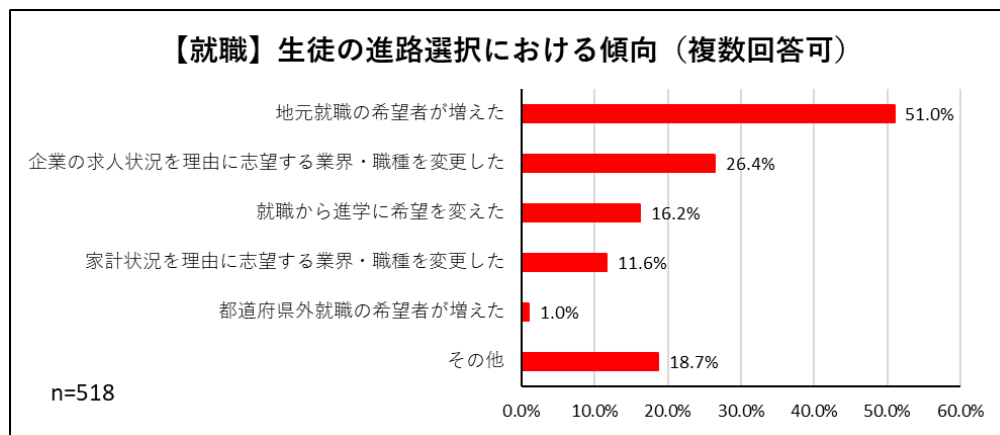


いるようだ。ただ、7割以上の教員が企業訪問や見学会は重要だと考えているように、求人票からでは把握できない職場の様子を自分の目で見て確かめる必要性はあるだろう。

そのほかのイベント系の手段では「校内の進路行事 (対面)」が 40.7%、「校外の進路相談会 (対面)」が 25.6%だった。しかし、オンラインでの進路行事や相談会と回答した教員の割合は低いことから、就職に関係するオンラインイベントの普及度合が影響している可能性はあるものの、進学以上に対面でのやりとりを重視していることがうかがえる。

**Q10. 【就職】生徒の進路選択における傾向についてお答え下さい。(複数回答可)**

コロナ禍での就職希望者の進路選択における傾向について、最も多かったのは「地元就職の希望者が増えた」(51.0%)だった。進学希望者と同様に、首都圏や地方主要都市などコロナの感染拡大が顕著な地域への就職



をきらい、地元志向が広がった傾向にあるようだ。また、「企業の求人状況を理由に志望する業界・職種を変更した」(26.4%)と回答した教員が3割近くいることから、コロナの感染拡大によって大きな打撃を受けた業界や職種への就職を目指していた生徒は、希望の変更を余儀なくされた可能性がある。就職から進学に進路を変えた生徒も16.2%と一定数いることがわかった。

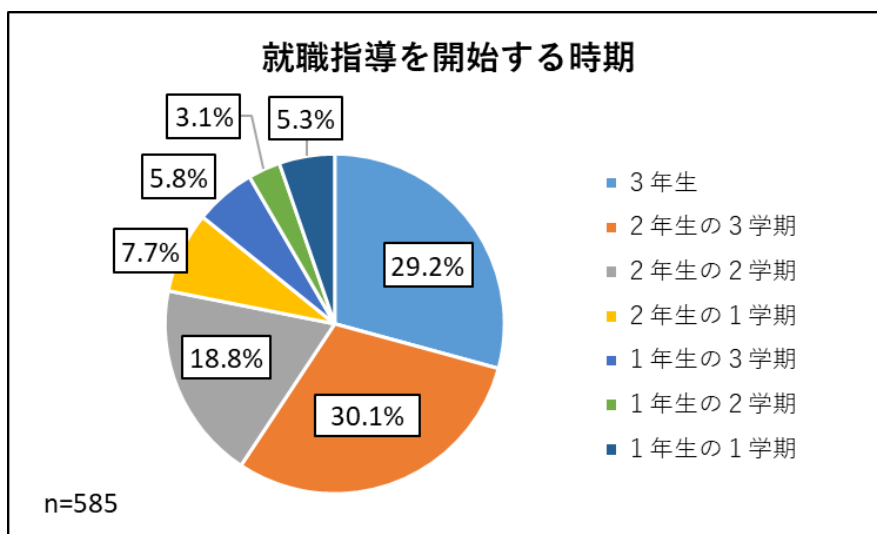
「その他」(18.7%)には「とくに変化はみられない」との回答があったほか、「公務員希望者が増えた」とする意見が複数件みられた。

## Q11. 就職希望者への指導を開始する時期はいつですか。

就職指導を開始する時期でもっとも多かったのは「2年生の3学期」(30.1%)だった。これに「2年生の2学期」(18.8%)、「2年生の1学期」(7.7%)をくわえると、6割近い高校で2年生のうちに何らかの就職指導を開始していることがわかった。3年生になってから指導を開始する高校は約3割だった(「3年生」29.2%)。

高卒就職の場合は3年生になって間もない7月に求人票が公開

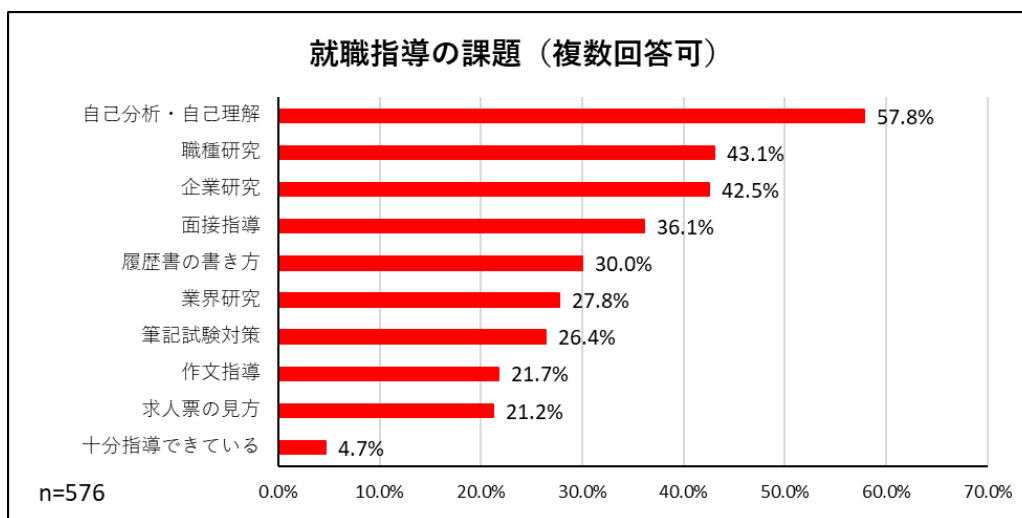
され、応募先を検討していくことになる。そのため、それまでに自己分析を含め、業界・職種・企業研究のやり方や求人票の見方などについて指導する必要がある。よって、2年生の段階から希望者への指導を開始しようとする高校が多いと予測できる。



## Q12. 就職希望者への指導について、課題に感じている点は何ですか。(複数回答可)

Q11で6割近い高校が2年生から就職指導を開始していることがわかった一方で、就職希望者への指導について「十分指導できている」と回答したのはわずか4.7%だった。

「自己分析・自己理解」(57.8%)、

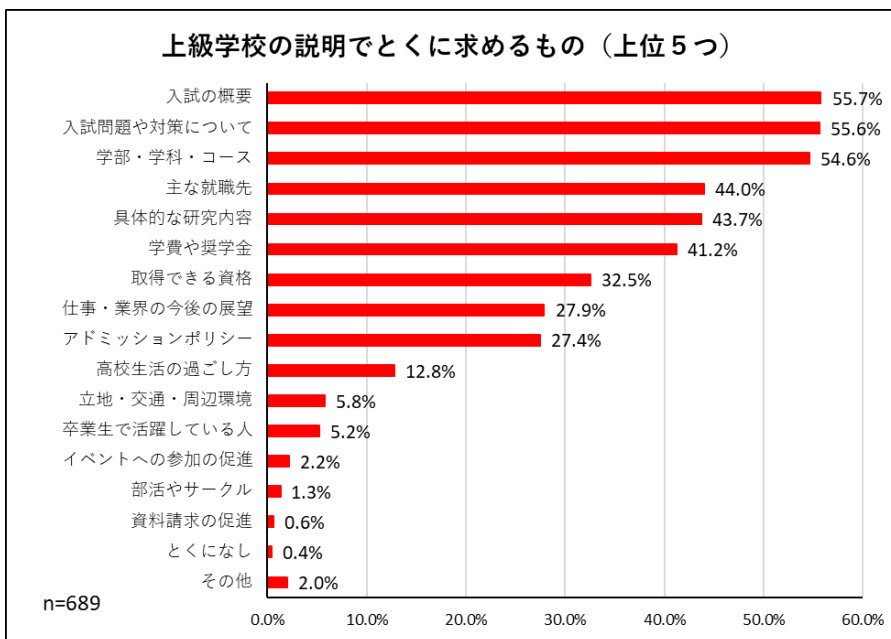


「職種研究」(43.1%)、「企業研究」(42.5%)、「業界研究」(27.8%)などを課題として挙げた高校が多く、調査や分析を必要とする内容への指導に課題を抱えていることがわかった。いずれも、大学生や社会人でも難しいとされる内容で、高校生への指導に苦慮している様子がうかがえる。就職試験の鍵となる面接に対する指導不足も、36.1%の教員が課題に感じていることは看過できない。

面接指導や履歴書の志望理由など、最終的に個別の指導が必要になるため、とくに就職希望者の多い高校にとっては時間的な面でも十分な指導を施すことが難しいと感じている可能性もある。

### Q13. 進路ガイダンスや学校見学会での上級学校の説明で、とくに求めるものは何ですか。(上位5つまで)

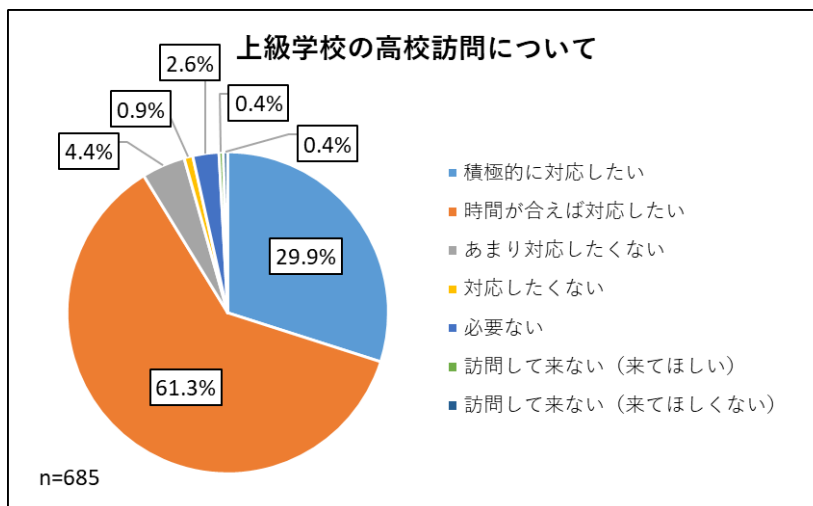
「入試の概要」(55.7%)や「入試問題や対策について」(55.6%)など、入試に関する説明を求める声が多かったのは、大学入試改革において入試が多様化かつ複雑化しつつあるからだと考えられる。また、「学部・学科・コース」(54.6%)にくわえて、「具体的な研究内容」(43.7%)を求める声が多かった理由は、進路ガイダンスにて生徒が各学校を比較検討したうえで進路選択できるように、大学や専門学校には他校とのちが



いに基づいた各教育機関の特徴を説明することが求められているからだと予測できる。そのなかで、各教育機関の特徴が表れるとともに、とくに総合型選抜や推薦型選抜で理解が求められる「アドミッションポリシー」(27.4%)は、他項目と比べると、それほど多くなかった。さらに、AI や IoT などの技術革新による社会変革が注目されるなか、「仕事・業界の今後の展望」(27.9%)に関する説明も同様に、他項目と比べると少ない結果となった。

### Q14. 上級学校の高校訪問についてどのようにお考えですか。

上級学校による高校訪問について、教員はどのように考えているのかを聞いた。「時間が合えば対応したい」(61.3%)と「積極的に対応したい」(29.9%)を合わせると9割を超えた。また、「あまり対応したくない」(4.4%)、「対応したくない」(0.9%)と考えているのは、わずか5%程度だったことから、多くの教員が高校訪問について前向きな考えをもっていることがわかる結果となった。ただ、対応したいとし

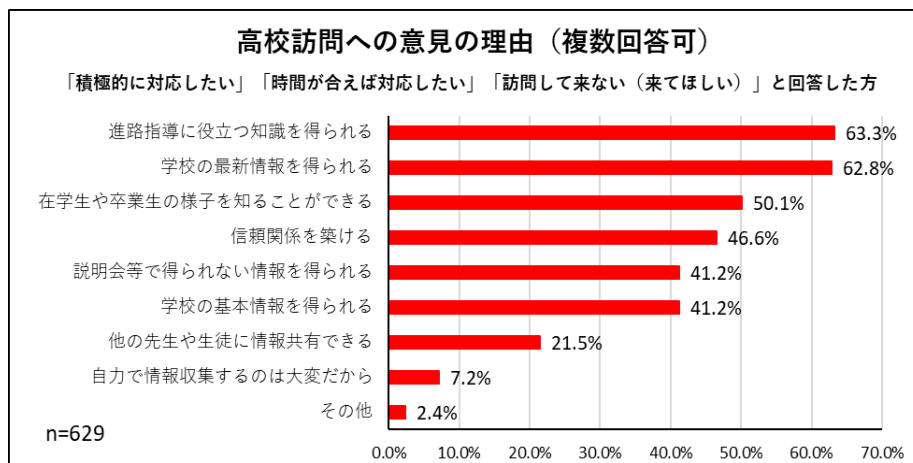


つつも「時間が合えば」と回答した教員が多いことから、やはり通常業務が忙しい様子がうかがえる。そのため、訪問する側が対応してもらえる時間について考慮する必要があるだろう。

「訪問して来ない」(0.8%)と回答した教員は少ないことから、上級学校による高校訪問は活発に行われているようだ。

**Q14-1. 「積極的に対応したい」、「時間が合えば対応したい」、「訪問して来ない(来てほしい)」と回答した方にお聞きします。その理由は何ですか。(複数回答可)**

「進路指導に役立つ知識を得られる」(63.3%)がもっとも多く、次いで「学校の最新情報を得られる」(62.8%)と回答した教員が多い。生徒から具体的な学校について相談があった場合、教員視点でアドバイスできる態勢を整えておきたいとする様子が見えてくる。



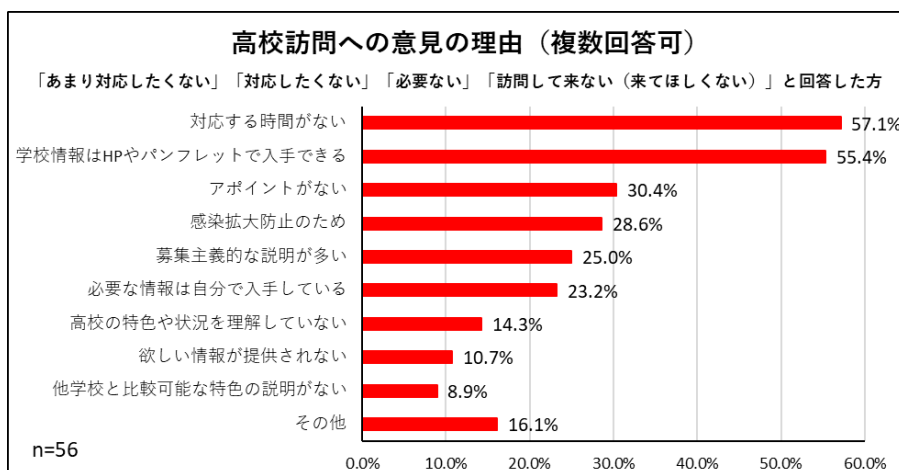
「在学や卒業生の様子を知ることができる」(50.1%)

こともメリットのひとつであるようだ。教員は、学生が進学先でどのような学校生活を送り、どう成長しているかを上級学校の評価基準のひとつとし、受け持っている生徒への指導にも役立てていると推測できる。「信頼関係を築ける」(46.6%)が同等の回答数を得ているのも、関係者と会い情報提供をし合うなかで、安心して生徒を送り出し、受け入れてもらうための関係を構築したい様子が表れているのだと考えられる。

「その他」(2.4%)の意見には、「パンフレットでは分からない情報もある」や「出張授業の提案ができる」など、訪問だからこそそのコミュニケーションに価値を感じている声があった。

**Q14-2. 「あまり対応したくない」、「対応したくない」、「必要ない」、「訪問して来ない(来てほしくない)」と回答した方にお聞きします。その理由は何ですか。(複数回答可)**

「対応する時間がない」(57.1%)と、忙しさによる理由がもっとも多かった。また、いまは学校ホームページやデジタルパンフレットなど、最新の情報にいつでもアクセスできる手段があることから、公開されている情報を得るために会う必要はないと考えている教員もいるようだ(「学校情報はHPやパンフレットで入手できる」55.4%)。



教員は授業の空き時間にも生徒対応や授業準備、その他の業務に追われていることも多く、時間の確保が難しい。そのなかで、アポイントなしでの訪問は悪い印象を与えてしまうことになる(「アポイントがない」30.4%)。さらに、Q14-1で判明したように、「進路指導」「最新情報」「学生の様子」「信頼関係」を訪問のメリットの軸として考える教員に対し、募集主義的な説明は逆効果なようだ(「募集主義的な説明が多い」25.0%)。

「その他」(16.1%)には「企業が訪問してくる時期は迷惑」「こちら話を聞かないから」などの意見があった。



### 【調査概要】

調査目的:コロナ禍における高等学校の進路指導および、高校生の進路選択の状況を明らかにする。

調査方法:FAXによる配付・回収

調査対象:高等学校進路指導部 延べ 4,717 校(全日制・定時制・通信制・サポート校など)

調査期間:2021年7月8日~7月16日

有効回答数:693 枚(回答率 14.7%)

### 【回答校内訳】

設置者別:

設置者	回答校数	割合(%)
国立	3	0.4
公立	476	68.7
私立	214	30.9

地域別:

地域	回答校数	割合(%)
北海道	69	10.0
東北	86	12.4
北関東	44	6.3
南関東	123	17.7
甲信越	35	5.1
東海	95	13.7
北陸	30	4.3
近畿	56	8.1
中国	54	7.8
四国	24	3.5
九州・沖縄	77	11.1

### 【会社概要】

株式会社ライセンスアカデミー (<https://licenseacademy.jp/>)

本社所在地:東京都新宿区百人町 2-17-24

代表取締役:白田康則

### 【本件に関するお問い合わせ先】

株式会社ライセンスアカデミー 進路情報研究センター

担当:齊藤

E-mail:yuta-saito@licenseacademy.jp

TEL:03-5925-6228